

岩手医科大学歯学会第8回総会

日時：昭和57年11月13日（土）午前10時45分より

会場：岩手医科大学歯学部大講堂

演題1 顎骨骨折に対する金属プレートの使用経験

○大和田孝一，柘植信夫，伊藤信明，大屋高德
工藤啓吾，藤岡幸雄

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

最近，口腔外科領域でも顎骨骨折に対して金属プレートによる観血的整備が行われるようになってきた。その利点は，強固で確実な整備固定が得られ，さらに在院期間の短縮や早期の咬合回復などが挙げられている。我々は昭和54年からの4年間にA-O式金属プレートを19症例に応用したので報告する。

年齢別では，10歳代が8例と最も多く，性別では男性が17例と圧倒的に多かった。原因別では交通事故が10例を占めていた。骨折部位は下顎角部が10例と最も多く，骨折線数では単発骨折6例，多発骨折13例であった。受傷日から手術日までの期間は14日以内が10例と過半数を占めていた。また救命処置や他科的処置を優先させたため1ヶ月以上の入院を要した症例もあった。

手術法は口外法13例，口内法6例であった。口外法は骨片の偏位の大きい症例や陳旧性骨折あるいは皮膚切開を要する欠点がある。一方，口内法は審美にすぐれ，比較的骨片の少ない症例に適している。プレート適用部位は下顎角部が8例と最も多く，これは小骨片が内方に偏位していたためと思われた。顎間固定の期間を検討すると14日以内が14例と70%以上を占め，また15日以上の長期間を要した5例には関節突起部骨折や骨片の適合不全例が含まれていた。歯列および歯牙の状態を観察すると無歯顎および多数歯欠損7例，少数歯欠損11例，小児歯列2例であった。少数歯欠損例に応用したのは在院期間の短縮および早期の咬合回復のためである。一方，小児の場合は歯胚の位置に注意し，下顎骨の下縁部に適用すべきである。

金属プレートの除去については種々の見解がある。我々は今まで19症例中6例のプレートを除去したが，その他の症例についても経過観察を続けていきたい。

演題2 反対咬合患者の治療にかかわる顎骨成長の影響について

○中野廣一，大沢俊明，谷本 明，久保田誠一
亀谷哲也，石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

混合歯咬合期前期から咬合の治療を行った反対咬合患者の中で，被蓋改善後，思春期性の下顎の発育によって咬合の不安定となった症例群（10例）と咬合の安定していた症例群（26例）の歯齡ⅢA期からⅣA期までの各期における顎顔面形態のちがいについて，頭部X線規格写真上の角度計測8項目と距離計測9項目から得られたEデータを主成分分析法を用いて解析し，検討してみた。

その結果，歯齡ⅢA，ⅢB期にすでに2群の間には，主と前頭蓋底の長さ，上下顎骨の相対的位置，下顎の形態に差が認められた。しかしながら，ⅢC期では，その判別は困難であったが，ⅣA期では再び高い率での判別が可能であった。このようなⅢC期からⅣA期にかけて見られる変動は，両群間に思春期性の下顎の成長時期や成長量，あるいはその時期にずれがあるために生じたものと思われる。

今回の研究の対象となった反対咬合患者はすべて治療開始時から一貫して下顎の成長抑制処置を行っていたが，個体のもつ成長ポテンシャルの旺盛な症例では，抑制の効果があまり充分には認められなかった。

このことから頭蓋底も含めた上顔面部の劣成長を伴う発達期の反対咬合症例に対しては，下顎の成長抑制処置のみならず，できるだけ早い時期からより積極的な顎顔面の成長誘導が必要であると考えられた。

演題3 チューリッヒ大学顎・顔面外科学教室での経験

○大屋高德

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

私は，昭和56年4月からスイス・チューリッヒ大学顎顔面外科学教室に於いて，H. Obwegeser 教授のはからいで約1年間にわたり手術学を中心とした臨床的・基礎的な御教示をいただく機会を得た。そして，ことに顎変